夕刊フジ　2021年2月27日（26日発行）

ニッポン臨終図巻

ドクター和の

⑲④ 元ヤクルト　安田猛

「がんに負けるか!!笑って死んでやる」

長尾和宏（ながお・かずひろ）　医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

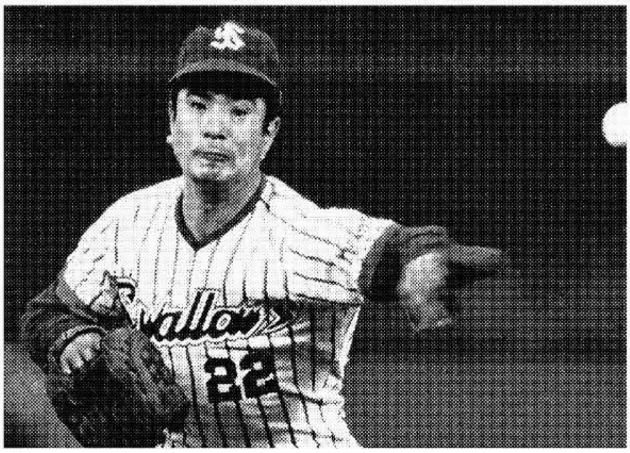
あなたががんと診断されたとき、次に気になるのは、「ステージ」ではないでしょうか。ステージとは、がんの進行具合を表す目安のことです。日本語では、「病期」と呼ばれます。初期のステージ0期からⅣ期の5段階に分けられます。

がんのステージは、①がんの大きさ（T因子）②周辺のリンパ節への広がり（N因子）③他の臓器への転移は見られるか（M因子）―という3つの因子を、がん取り扱い規約に照らし合わせて判断されます。

病理医とは直接患者さんを診るのではなく、採取した組織や細胞を顕微鏡で見て、最終的な病気の診断を行う医師のことです。がんのステージ別の治療方法は各がん学会のガイドラインで決められていて標準治療と呼ばれます。もしステージⅣと診断された時、そのまま外科手術が行われることはありません。ステージを下げる目的か、延命目的での抗がん剤治療や放射線治療が提案されることが多いです。

そのため、「ステージⅣ」＝死、と捉えてしまい、なかにはうつ状態に陥ってしまう方もおられます。しかし、ステージⅣの患者さんと日々向き合っている僕から言わせれば、ステージⅣ＝死とは限りません。

特に大腸がんはステージⅣから完治する人がいます。また緩和ケアを受けながら結構長期間、普通に日常生活を送る人もおられます。



安田猛投手

1970年代にヤクルトのサウスポーとして活躍。78年には初優勝へ導きました。「ペンギン投法」と言われる独特の投げ方で、王貞治選手になかなか打たせなかったことから、「王キラー」と呼ばれるなど、昭和の名投手として記憶に残る安田猛さんが、2月20日に都内の自宅で亡くなりました。享年73。死因は胃がんとの発表です。

安田さんがステージⅣのスキルス性胃がんと診断されたのは、2017年のこと。ステージⅣの胃がんには外科切除の適応はなく、やるとすれば抗がん剤です。このとき、余命1年程度と診断されたそうです。しかし安田さんは、絶望しなかった。

「がんなんかに負けてたまるか！　笑って死んでやる」と周囲に話していたそうです。

その宣告から2年後の19年7月。ヤクルト球団50周年記念のOB戦で、安田さんは神宮球場のマウンドに38年ぶりに立ちました。たった2球でしたが全力投球、往年のスワローズファンから喝采を浴びました。

その後も安田さんは母校の小倉高校野球部をサポートするなど、大好きな野球と共に生きられた。「笑って死んでやる」。力強い言葉を残されました。